

『拾遺和歌集』における物名歌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4700

『拾遺和歌集』における物名歌

中 周 子

一

物名は『古今集』においては部立名称の一つとなったが、後の勅撰集においてはほとんど部立名称となることはなかった。二十一代集で物名巻をもつのは、『古今集』以外には『拾遺集』『続後拾遺集』の二集にすぎない。しかし、一卷をなさないまでも、例えば『千載集』の雑歌下には雑体の歌として旋頭歌や折句歌に並んで物名歌十一首が収載されている。同様に物名歌群を持つものは少なからずある。

物名歌の生成については和歌が仮名で表記されるようになったこととの関係が指摘されている。ある詞の文字の連なりから、本来の意味と関係のない意味をもった詞がうかびあがってくる面白さによって物名歌は盛行した。確かに、読みようによつて、別の語が見いだせる歌は少なくない。物名歌を収載しない『後撰集』においても、例えば雑三には次のような読人不知の歌がある。

思ふ事侍りける頃、志賀に詣でて

世の中を厭ひがてらに來しかども憂き身ながらの山にぞ有ける
この歌なども、「志賀、長良山」を詠み込んだ物名歌として収載することもできたといえよう。

後述するように、『万葉集』以来、物名歌は脈々と作られてきたのであるが、四季の歌や恋の歌という抒情の和歌を主流とすれば、言語遊戯的な性格の強い物名歌は常に傍流であった。その中で、『拾遺集』においては物名の歌が一卷をなすのみならず七八首も収められている。この歌数は、物名巻を持つ『古今集』の四七首、『続後拾遺集』の二七首と比べても格段に多い。『拾遺集』においては、物名巻の歌数は、春や秋の巻の歌数に拮抗するものとなっているのである。『拾遺集』において、物名歌は何故これほど重視されたのであろうか。また、物名歌を重視しているという事実は、『拾遺集』全体の編集方針とはいかに関わり合うのであろうか。

本稿では、まず『拾遺集』までの物名歌の流れをたどり、次に『拾遺集』所収の物名歌を分析することを通して、『拾遺集』において物名歌が重視された意味を考察したい。

物名歌の濫觴は『万葉集』の巻十六に収められた十余首に求められる。ここでは何が如何に詠みこまれているであろうか。次の長忌寸意吉麿の歌を見てみよう。

詠行藤蔓菁食薦屋梁歌

食薦敷 蔓菁煮将来 梁尔 行藤懸而 息此公

このように、行藤、蔓菁、食薦、梁という物どもを一首中に詠み込んでゐる。「食薦を敷いて、青菜を煮てきましょうよ、屋根の梁に行藤を懸けて休んでいて下さい、あなた」と、なんとか意味の通じる歌に成っているもののこじつけの感が強い歌である。意吉麿にはまた「撰具雑器狐声河橋等物」を詠んだ歌もある。

刺名倍尔 湯和可世子等 樺津乃 桧橋従許武 狐尔安牟佐

武

「さし鍋に湯を沸かしなさい、子供達よ。樺津の桧の橋からやってくる狐に浴びせてやろうよ」と詠むこの一首は、宴席で耳目に触れた物の名に「関けて詠め」との声に応じて詠まれたものである。

「刺名倍(さし鍋)はつぎ口と柄のある撰具、「樺津(いちひつ)は現在の天理市樺本付近の川津の名であると同時に、雑器「櫃(ひつ)」の語が含まれている。「橋」狐が詠みこまれ、さらに「許武(来む)には狐の泣き声「コン」が響かせてあるという懲りようである。他の語と擬声語、事物名の一部を掛詞として用いている点は、単に事物名を並べた前引の詠に比べると、より技巧がこらされている。

る。次の「作主未詳歌一首」には「梨、棗、黍、粟、葛、葵」という植物名が詠み入れられている。

成棗 寸三二粟嗣 延田葛乃 後毛将相跡 葵花咲

掛詞を駆使して、六種類もの植物名を関連させ一首にまとめ上げた歌である。また、次の「詠荷葉歌」を見てみよう。

蓮葉者 如是許曾有物 意吉麿之 家在物者 芋毛乃葉尔有

之

自家の蓮の葉を芋の葉のようだと詠み、芋には「妹」を、蓮には美女を譬えて、対比させたところに面白さがある。「蓮葉」自体はめずらしい歌材ではない。後にあげるように、相聞歌にも用いられている。この歌が題材ではなく発想における滑稽味を眼目としていることは明らかである。

次の一首も酒席での詠で、饌食を盛るのに用いていた蓮葉に関けて作られた歌である。

久堅之 雨毛落奴可 蓮葉尔 淳在水乃 玉似将有見

ここでの「蓮葉」は相聞歌(三三〇三)中にも使われている序詞「御佩乎 釵池之 蓮葉尔淳有水之」と同じ発想であり、その光景が一首に成った感がある。物の名称を詠み込んだ歌と他の歌との区別はあいまいでもあった。

万葉集の同歌群には他に「詠双六頭歌」「詠香、塔、厠、屎、鮒、奴歌」「詠酢、醬、蒜、鯛、水葱歌」「詠玉掃、鎌、天木香、棗歌」「詠白鷺飛啄木歌」等があり、また「枳、茨、倉、屎、櫛、刀自」、「虎、古屋、青淵、蛟龍、剣太刀」等をそれぞれ組合せて詠まれた「詠数

種物歌」がある。

これらの万葉歌は、一様に物の名称を読み込んだ歌であるが、二つの特徴が指摘されよう。一つは「醬」「酢」等の食材はじめ、「屎」や「廁」という従来の歌に読み込まれることがない題材を用い、題材そのもの、また題材の組合せが意外なものをいかに一首にまとめあげるかに主眼がある点。二には、逆に、普段歌材となりうる景物「蓮」や「葛」を通常とは異なる滑稽味をもって詠じている点である。題および発想における意外性に興味の中心がおかれている歌である。事物名が詠み込まれる際には掛詞の技巧も目立つ。これらの万葉歌の中には、『古今集』以降の物名歌にもあてはまる特徴に通うものがすで見いだせるのである。

三

前述した如く、『古今集』においては物名の部立が設けられたほど物名歌は盛行した。『古今集』の物名歌を一覧すると、和歌にまったく無関係な物を詠み込む面白さや物名そのものの意外性のみならず、和歌に縁の深い事物が文字の連なりこそ同じながらあらぬものと化す意外性が重視されている。そして後者の物名歌にこそ『古今集』物名歌の開拓した新しい知的な歌が多く見いだせる。

物名巻は、鶯、時鳥といった春夏の景物を代表する鳥の名を読み込む歌で始まる。巻頭歌をあげておこう。

うぐひす

藤原敏之朝臣

心から花の雪にそほちつうくひずとのみ鳥のなくらむ

雅びやかな鳴き声で春を告げる鶯が、梅の花の雪にぬれながら「憂く干ず」と鳴くのだと空想する面白さは従来の自然詠にはなかった発想の歌である。

四季や恋の歌と同じ歌材を詠じながら、物名歌であることの定義については次の顕昭『古今集註』の説明が簡略ながら要を得ている。

モノノナトイフハ、例ノ歌ニ鶯・郭公・梅・桜ナドヲヨミタル
ヲバイハズ、其名ヲバヨミスエナガラ、コトザマニイヒナシタル
ルヲ云ナリ。但、ソノヨミヤウニ様ナリ。一ニハ歌ノココロ、
ヤガテソノ物ゲニヨミナガシテ、サスガニアラハニ、ソノ名ヲ
ヨマズシテカクセリ。(中略) 一ニハ、ソノモノノナラバスエ
ナガラ、アラヌサマノコトニヨミナセリ。

後に「隠題」の異称が生まれるが、真淵は「かくし題といふ人もあれど題とはあらはに云意なれば叶はず、かくし詞などはいひもすべし」と、歌の内容と無関係な語を題というのは不自然としてむしろ「隠し詞」と呼ぶことを提唱している。

しかし、平安時代において題の概念は未だ確立していなかったといえる。『古今六帖』の和歌の分類項目名を題とすれば、例えば第六帖の「きちかう」「りうたむ」「しをに」「くたに」「さうび」「かにひ」「からも」「くるみ」等の題のもとに集められている歌はすべて物名として詠み込まれたものであり、それぞれの花そのものは詠まれていない。歌の内容はその花と関連が有るものと無いものと両様である。一方で、「らに」のもとに収載された歌には「らに」の語は

詠み込まれず、すべて「ふちばかま」とその風情が詠まれている。

『古今六帖』においては、物名歌と自然詠との区別は行なわれてはいないといえよう。ある題の景物の名称を文字の連なりとしてのみ詠み込んだ歌も、その景物を詠じた歌と同列に並べられているのである。

これは、歌合においても見られる現象である。例えば、天禄三年の秋に、庭の草花や虫を歌題にして行なわれた「女四宮歌合」の「をみなへし」題の勝負を見ると、女郎花そのものを詠じた歌と「玉の緒をみなへし人の」という物名として詠み込んだ歌とが番われている。物名も題のひとつであった。そこで、本稿では、物名巻において物名歌に付された題を、いわゆる題の下位分類として物名題と呼ぶことにする。

『古今集』の物名題を一覧すると四季折々の、あるいは恋の風情を担う景物が主となっている。空蟬、しのぶ草、をみなへし、あふひ、わらび等も恋の歌に常用された歌材である。最も多い物名題は前栽合の題となることの多かった植物名である。また、地名は唐崎、淀川、交野等の歌枕ともなる景勝地、からこと、かみや川という「唐琴」や「和紙」等の雅びな風情に通じる名称が並ぶ。巻末には、いわゆる雑名と分類される食物名や調度品名が並ぶ。しかし、まったく日常生活の片鱗を表すだけの事物ではない。百和香、すみながし、おき火、ちまきは、いずれも香や墨（炭）、五月の節句に関わる、和歌に縁の深い物名題であり、すなわち和歌を贈る折とその際の風流に関わり深いものであるといえよう。

また、二首のみであるが「をみなへしといふ五文字を句のかしらにおきてよめる」（439番詞書）、「は」をはじめ「る」をはてにて『ながめ』をかけて時の歌よめ（468番詞書）といった、むしろ折句、沓冠の歌といふべきものも含んでいるが、やはり「女郎花」や「春」の語を詠みこんだものと認識されていたのであろう。

このように、『古今集』の物名題は、物名歌にのみ詠まれる詞もあるとはいえず、実際に目にする美しい花の名、四季を告げる自然の景物であり、地名も雑名も和歌に縁の深い語を含むものを中心となっている。

四

『古今集』物名巻の四八首は『拾遺集』では七八首へと増加している。歌数のみからしても、詠み込まれた物名の内容・種類が多様化していることは推測される。『拾遺集』の物名歌においては、どのような事物の名が詠み込まれたのかについては、従来『拾遺集』には、『古今集』には「ちまき」のみであった食物名が多いこと、また通俗的な事物が増加した上に歌自体も日常詠が多く、滑稽味が増していること等が指摘され、『古今集』からの変化の面が強調されてきた。

しかし、物名題のうち最も多いのは植物名である。この点では『古今集』の枠組みを出るものではない。ただし、『古今集』の植物名と比べると、まったく同じものは「けにこし」のみである。ほぼ同

じ物としては（以下の括弧内に『拾遺集』の題を挙げた）、梅（紅梅）、
樺桜（桜）、りうたむの花（りうたむ）、きちかうの花（きちかう）、さ
がりごけ（すはうごけ）、かきつばた（かいつばた）が共通するもの
である。

『拾遺集』では次に食品名・調度品の名が多い。『古今集』にも、
一、二例ながら食物調度品もある。『古今集』で取り上げられるこ
との少なかつた事物に注目したと考えられる。そもそも、物名の
歌を見て行くと、同じ物名題が複数以上の歌に詠みこまれることは
あまりない。一度しか詠み込まれないものがむしろ多い。

例えば、「宇多院歌合」がその理由を物語っている。物名歌を合
わせたこの歌合では、次のように左右ともに同じ語に置き換えてい
る場合が多い。

はるのはな 左持

貫之

年変はる野はなほことになりぬらし鹿の子まだらに雪も消にけり

右

忠岑

白雪の消えて緑に変はる野はながれて色のうつらざらなむ

子の日を惜しむ 左

貫之

胸の火を惜しもぬかねば乱れ落つる涙の玉にかつぞ消ちつる

右勝

忠岑

暗き夜にともす螢の胸の火を惜しもとけたる玉かとぞみる

『古今集』の選者達が行なつた、高度な技巧をこらしたと
いわれる物名歌合といえ、同じ名をどのような語に置き換えるか
を競つたと思われるのであるが、この他にも部分的に共通の文字を

含む語がほとんどで、まったく違う語として詠んだものは一組にす
ぎない。左右の歌ともにほとんど同じ語に置き換えている場合が多
い。読み込もうとする詞を別の意味のある語に置き換えることがで
きる可能性は、おのずと限られてくる。同じ物名を詠みこんだ歌が、
たいてい一、二首しか見当らないことは、このあたりの事情による
ものであろう。

『古今集』と『拾遺集』とに同じ物名題は「けにごし」しかない。
その歌を比較すると、

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露の染むるばかりを

（古今・名実）

忘れにし人のさらにも恋しきかむげにこじとは思ふものから

（拾遺・読人不知）

「うちつけに濃し」「むげに来じ」と一例ながら別の語に置き換え
られている。また、同じ花の名の物名題の歌二例を比べてみると次
のように詠まれている。

「きちかう」

秋ちかうのはなりにけり白露の置ける草葉も色変りゆく

（古今・友則）

あだ人のまがきちかうな花植ゑそにほひもあへず折つくしけり

（拾遺・読人不知）

「りうたむ」

わが宿の花ふみしだくとりうたむのはなければやここにしも来
る

（古今・友則）

河上に今よりうたむ網代にはまづもみぢ葉や寄らんとすらん

(拾遺・読人不知)

「きちかう」は「籬近う」と「秋近う」と、いずれも「近き」のウ音便が用いられ、「りうたむ」は「鳥打たむ」今より打たむといずれも「打たむ」という語が用いられている。『拾遺集』には「…の花」としなかつたゆえに、違う詞を用いる可能性が広がったといえよう。

このように、物名を詠み込むために使用し得る詞が限られてくることによって、今まで詠みこまれたことのない語彙の中から、新しく物名題が採られたのである。『古今集』が一例しかあげなかつた「ちまき」に準じる食品名や、「百和香」等の調度品の類に新しい物名が模索され、それらを『拾遺集』は掘り上げたのである。

五

『拾遺集』物名巻の配列は『古今集』をもとに考えられてきた。すなわち、『古今集』の物名巻は鳥虫名・植物名・地名・雑名等、

物名の分類によって歌は配列・構成されている。同様に『拾遺集』の物名題を分類して示すと次のようになる。(数字は歌番号、鉤括弧内は詞書に書かれた物名、丸括弧内は作者である)

①植物名を詠む歌、三五四「紅梅」(読人不知) 〳〵三六八「はぎのはな」(忠岑)

②虫名を詠む歌、三六九「松むし」(忠岑) 〳〵三七〇「ひぐらし」(忠

岑) 〳〵三七一「ひぐらし」(貫之) 〳〵三七二「ひぐらし」(貫之)。

③植物名を詠む歌、三七三「ひともとぎく」(輔相) 〳〵三七四「すはうごけ」(輔相)

④地名を詠む歌、三七五「やまと」(輔相) 〳〵三八八「つつみのたけ」(紀輔時)

⑤植物名を詠む歌、三八九「むろの木」(高向草春) 〳〵三九三「しばみ」(読人不知) 〳〵三九四「ねりがき」(輔相)、

⑥雑名を詠む歌、三九五「おはりごめ」(輔相) 〳〵四三一「四十九日」(輔相)

植物名の歌が分散して置かれており、植物名の歌の中に虫名や地名が置かれていることがわかる。この事象については、既に『拾遺集』の基となった『拾遺抄』の歌を増補する際に、同じ作者の詠をまとめたために起こった配列の乱れであるとの指摘がなされている。すなわち、①③の植物名を詠む歌群中に②虫の歌が二首おかれている箇所において植物・虫いずれの名をも詠んでいるのは忠岑であり、また、③⑤の植物名を詠む歌群中に④地名を詠む歌群が置かれているが、輔相の作が並ぶ箇所である。

因に、『拾遺抄』雑上の巻末部(四七四〳四九六番歌)の物名歌群では次のようにほぼ分類されて配列されている。

①地名を詠む歌 四七四〳四八一

②植物名を詠む歌 四八二〳四八四

③鳥虫を詠む歌 四八五〳四八八

④雑名を詠む歌 四八九〳四九七

地名から始められているのは、この物名歌群の直前には「稻荷」にまつわる歌が配列されているので、その連想から地名の歌が続けられたのであろう。

『拾遺集』物名巻においては、物名ごとに分類・配列されるよりも、同じ作者名でまとめたと見られる箇所が少なくない。同じ作者の歌として連続して配列されることが最も多いのは三七首も入集している輔相である。七首がまとめられる場合もあり、六首、四首続けて配列されることが各二度もある。外にも、複数以上物名巻に歌を選ばれている歌人は三名、忠岑四首、貫之三首、重之二首であるが、その内、忠岑の三首、貫之の二首が並べて配列されている。「同じ作者の歌を一まとめにする方法」は確かにとられている。しかし、『拾遺集』においては物名の分類のみによって配列構成されてはいないことを、類題的な配列が乱れた結果とのみ考えてよいであらうか。

物名を如何に読み込むかのみに腐心した物名歌を配列するにあたっては、四季や恋の部が、自然の推移や恋の進展により配列し得るのとは異なり、歌の内容的な配列の原理は見だし難いといわれている。しかし、一見、無関係に配列されているように見える物名歌の巻であるが、物名題のみならず、隣り合う歌の内容やことばを詳細に辿って行くと、配列の意図を窺いうる箇所が少なくない。次に、配列に何らかの意図を窺い得る箇所について考えてみたい。

六

まず、物名巻は春の花を代表する梅と桜の歌に始まる。巻頭歌の物名題は百花の魁といわれる梅、なかでも平安時代に渡来した紅梅である。「うめ」ではなく「こうばい」とした漢音読みは『古今六帖』においても題として立てられている。清少納言が「木の花は濃きも薄きも紅梅」と真つ先にあげた花である。平安後期の新しい好みを反映した物名題といえよう。因に、清少納言も二番目に桜をあげている。『古今集』物名巻が代表的な鳥名で始めたことに対して、代表的な花の名で始めたのであろう。

その後は岩柳、さるとりの花、かひにの花、かいつばた、さくなむさ、しもつけ、りうたむ、きちかう、あさがほ、けにごし、らに、刈萱、萩の花等々『古今集』や歌合でも取り上げられることの多い花の名がつづく。そして、植物名「萩の花」の次に、虫の名、松虫とひぐらしが置かれている。

はぎのはな

忠岑

山川は木の葉流れず浅き瀬をせば淵とぞ秋はなるらん

松むし

忠岑

たきつ瀬の中にたまつむ白波は流るる水を緒にぞぬきける

この二首は、いずれも川の流れを詠じており、「瀬」「流る」という同じ詞が用いられている。前者は、萩の花自体は詠んでいないが萩にまつく無関係とはいえない内容である。秋の紅葉が散り、流れ淀む山河は淵となる。萩の葉も色付く秋の景色を連想させる歌である。また、萩は恋の歌に多用された花で、葉音は恋人の訪れを思わせ、色付いた下葉は恋人の心変わりを知らせる。松虫は恋人を待

つ気持ちを託す秋の虫である。夕暮の悲しいひぐらしの声は、恋人を「思ひ暮らし」泣きたい気持ちを託す秋の虫である。

秋の花と秋の虫は、いずれも秋に移ろう恋の情緒を表現する歌材という共通点をもっているのである。そして、次の物名題・一本菊も秋の花である。歌の内容も「あだなりとひととどきくる」と、不誠実な恋人を非難するものである。植物名と虫名という分類意識ではなく、むしろ、秋の草花の蔭で鳴く虫として共に配列されたのではなからうか。

植物名の一旦の区切りは「すはう苔」で、その後には地名が続く。「苔」は『古今集』の物名にも「さがり苔」があり、『古今六帖』にも「こけ」題がある。「蘚芳苔」は赤い色の苔であるが、最初の植物名が「紅梅」であったことが思い合わされる。地名歌群のあとには再び植物名が続く。しかし、なぜここに地名歌群が挿入されたのかが問題にされる箇所である。この箇所も、隣り合う歌の内容が何らかの関わりがあるとして配列されたのではないかと考えられる箇所である。

すはうこけ 輔相

鶯の巢はうごけども主もなし風にまかせていづちいぬらん

やまと 輔相

古道に我やまどはむいにしへの野中の草はしげりあひにけり
二首の歌の内容をみると、一首目が、風に誘われて、いずこへか飛び去った鶯の行方を気にする歌、二首目が大和の古道に惑う旅人の歌である。この二首は、鳥と人との差はあるのだが、旅の風情が

窺われる。植物名から地名にかけては、歌の内容と歌の詞が連想によって関わりあっているのではなからうか。

また「つつみのたけ」という地名に続けて「むろの木」がおかれている。これも、地名と植物名が混乱していると見られる箇所である。ただし、この二首は作者によってまとめられてはいない箇所である。

つつみのたけ 紀輔時

かがり火の所さだめず見えつるは流れつつのみたけばなりけり

むろの木 高向草春

神なびのみむろのきしや崩るらん龍田の河の水のにござる

地名の最後の一首にも「所さだめず」と旅人を連想させる詞が用いてあり、前引の「鶯の巢」を詠じた歌の「いづちゆくらん」に対応するかのようである。また、次の木の名「むろの木」の歌には「神なびのみむろ」との地名が読み込まれている。また「龍田の河」は、前歌の「流れ」に通じるといえよう。

以後の物名題と歌の詞とを辿ると、地名「つつみのたけ」、地名「神なびのみむろ」を詠じた木の名「むろの木」の歌、木の名「さきの木」、実のなる花の木「花柑子」、桃「木の名はしばみ」、食用の木の實「練り柿」、食物名「尾張米」が置かれ、以下食物が続く。このように、物名題と歌ことばの中に一部関わり合う語を含むものを、順次配列していることがわかる。

食物名は最も多様で数も多いが、「そやし豆」の後に鳥の名「雉の雄鳥」によって中断される。

そやしまめ

高岳相如

いさりせし海人の教へしいづくぞやしまめぐるとてありといひ
しは

きじのをどり

輔相

河ざしのをとりおるべき所あらば憂きに死にせぬ身は投げてまし
この一首にも、内容的な連続性が見いだせるのではないだろうか。
すなわち、一首目の内容は「都からやってきて、配流の人を訪ねる
という設定か」と考えられるが、『古今集』の、小野篁が流される
時の詠「天の原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよ海人のつり
ぶね」を彷彿させる詠である。そして二首目の憂き身を投げる河岸
を求めてさまよう歌は島をめぐる流人の心情とも解せる。

そして、多彩な食物名が続いた後は、食器の折敷、足鼎へと続く。
その後は、むな車、いかるがにげ、「鼠の……」と続くが、ここで
は、「足」から「車」「馬」という乗り物が連想されたと思われる。
「馬」から「鼠の……」は動物名を並べたのみならず、歌の内容も
関わり合うものと思われる。

いかるがにげ

躬恒

事ぞとも聞きだにわかずわりなくも人のいかるがにげやしまし

ねずみの琴のはらにこをうみたるを

輔相

年をへて君をのみこそねずみつれことはらにやはこをばうむべき
後者は、他の物名題と比べると異例な書き方である。二首目の歌
については「妻の恨み言に對して、夫が弁解するという設定」であ
ろう。そして、一首目の事情を聞き分けることもなく、怒り狂う妻

に驚き逃げ出そうとする夫の心情が読み取れる歌と合わせ読むとき、
一層の可笑しさが生まれる。まさに夫婦喧嘩の一コマを思わせる面
白さがある。

調度品の最後におかれるのは「かのかはのむかばぎ」で、その後
には、干支「かのかのえさる」が置かれる。「かのかのえさる」は庚申待ち
の習慣により、歌合の題になることが多い。この配列にも、次のよ
うな歌の内容に関連が見いだせる。

かのかはのむかばぎ

輔相

かのかはのむかはぎ過ぎて深からば渡らでたに帰るばかりぞ

かのかのえさる

輔相

かのかのえさる舟待てしばし事とはん沖の白波まだ立たぬ間に
「渡らでただに帰」った河を、「舟待てしばし」と舟で渡ろうと
するかのような、ひとつの場面が読み取れる。干支の後には、十干
「かのかの」十二支「ね、うし、とら、う、たつ、み」むま、ひつじ、
さる、とり、いぬ、ぬ」が続く、これらの物名題を配列することに
よって、おそらく時の流れを表現しようとしたのではないだろうか。
そして、巻末の物名題は「四十九日」である。

四十九日

輔相

秋風の四方の山よりおのがじしふくに散りぬる紅葉かなしな
秋風に散る紅葉に、死後の靈魂が現世と来世の間を彷徨う「かなし
さ」を象徴している。ここで、巻頭歌の「紅梅」が思い出される。

紅梅

鶯の巢作る枝を折りつれば子うばいかでか生まむとすらん

紅梅に春告げ鳥の鶯を取り合せ、さらに、歌の内容は鶯の巢作りと産卵を案じている。生命の誕生を案じる歌といえよう。巻頭歌は鶯の巢作りと産卵を案じるという生命の誕生を危ぶむ歌で始められ、巻末歌は死後の靈魂がさまよう中陰の期間を題にして、散り行く紅葉を悲しむ歌で終わっている。すべてが生成し消滅する無常の世の中に、移り行く自然界の現象と、そこで営まれる様々な日常生活と卑近な雑事、それらを広く包み込むことくの物名巻に、物名歌は配列されているのではなからうか。

七

『拾遺集』の物名歌については、従来、物名題の通俗化、歌の内容の日常化という面が指摘されてきた。また、物名を詠み込む技巧的な側面に注目されることが多かった。しかし、『拾遺集』の物名歌には、集中の他の自然詠や恋歌、述懐歌に通じる詠風をも見いだしうるのではなからうか。そのような観点から物名歌の一面を見ておきたいと思う。

次は、伊勢の作で「宇多院歌合」にも重出する一首である。また『古今六帖』『伊勢集』にも所収されている歌である。

かにひの花

わたつ海の沖なかに火のはなれ出でて燃ゆと見ゆるは海人の漁りか

歌合本文では十卷本二十卷本ともに結句が「天つ星かも」で作者

は友則となっている。結句は、『古今六帖』では「あまの漁り火」、『伊勢集』では「あまの漁りか」と異同がある。宇多院歌合は、貫之・忠峯等の古今選者が出詠した物名歌合であるが、『古今集』物名巻には一首も採用されていない。このことから、『古今集』成立以後の歌合ではないかと考えられている。従って、作者は『古今集』成立を待たずに没した友則とすることは疑わしく、伊勢とする説もある。

ところで、『拾遺集』は「海人の漁りか」との本文をとっている。歌合や『拾遺抄』本文では「天つ星かも」とあるのに対して『拾遺集』の編纂意図が窺える本文といえよう。

遥かに広がる海を空に、また果てしない空を海に譬えることは多い。古来、両者は似通う風景として詠まれてきた。ここでも、夜の海上沖に点在する火を「天の星かも」と見立てているのは、そのような表現に連なるものである。しかし、『拾遺集』は、実際の景である「海人の漁りか」とする本文を採用している。見立ての面白さでなく、夜の海の遥か沖に燃える火を見ての驚きと、あれが漁り火なのかと知った、日常の小さな発見をそのまま表出した詠となっている。

次は、拾遺集初出歌人で、物名巻に最多入集している輔相の作である。

あらふねのみやしろ

茎も葉もみな緑なる深片はあらふねのみや白く見ゆらん

『八雲御抄』巻第一に「藤六が多詠が中に、是は尤得体」と称賛

された詠である。

地中深く根ざした深芹の泥にまみれた長い根は、洗うと真つ白になる。葉と茎の緑に根の白さが映える。細い真つ白な芹の根は、汚れを祓い流したあととすがすがしい心の有り様、信心の象徴のようでもある。「神社」を詠じた歌にふさわしい内容をも備えているといえよう。身近にありふれた小さな自然をも慈しむ、こまやかな観察力が感じられる。

また、次の物名歌にも率直に人を恋う思いや素朴な日常感情があらわれてはいないだろうか。

飽かずして別れし人の住む里はさはこの見ゆる山のあなたか

(読人不知「さはこのみゆ」)

いとへどもつらき形見を見る時はまづたけからぬ音こそ泣かるれ

(輔相「まつたけ」)

思ふどころも変へず住みへんたちはなれなば恋しかるべし

(輔相「とち、ところ、たちばな」)

これらの詠には、物名という特別な詠法を用いつつも、『古今集』から変化展開しようとした『拾遺集』の歌の本質に通うものが見いだされるのである。^註

八

周知の如く、平安後期に編まれた第三の勅撰集である『拾遺集』二十巻は、十巻の『拾遺抄』を基に増補されて成立したといわれて

いる。ただ、歌数が倍増されただけではなく、両者の間には様々な編集方針の修正や変更があり、『拾遺抄』にみられない新機軸も打ち出されている。ことに『拾遺集』には『拾遺抄』にはなかった巻名が見られる。その一が物名巻である。そのように見てみると、『古今集』以降に盛行した、私家集や歌合における物名歌を拾遺するべく『拾遺集』は物名の部立を設けたのであるといえよう。『拾遺抄』よりも、より広く多様な和歌の有り様を反映すべく編まれた『拾遺集』の性格の一端がうかがわれるのである。

また、『古今集』物名巻が整然と分類されていることに比べて、混乱を呈しているかに見える配列の中にも、物名が歌の内容と様々に関わり合い、あるいは歌に使用されている「ことば」からの連想によつて関連づけられて、意図的に配列されていると考えられる箇所があった。

『拾遺集』の物名歌は『古今集』の物名歌よりも一層、技巧的になっている。のみならず、『拾遺集』の歌としての特色の一端を担うものでもあった。多彩な「ことば」をいかに和歌に詠み込むかにおいて様々に試行錯誤を巡さねばならない物名歌に一卷を与えたことは、「歌ことば」を重視する『拾遺集』の編纂方針と本質に通じるものがあつたと考えられるのである。

① 註
『新勅撰集』『続千載集』『新千載集』『新拾遺集』『新続古今集』に

も物名の小部立がある。

- ② 伊藤嘉夫『物名』の生成流転(『跡見学園女子大学紀要』第一号、一九六八年三月)に詳しい。

- ③ 『新編国歌大観』(角川書店)による。和歌の引用はとくに断らないかぎり、同書所収の本文によった。ただし、表記は適宜、直したものである。

- ④ 『日本歌学大系 別巻四』(風間書房)所収「古今集注」による。

- ⑤ 『俊頼髓脳』が初出例という。「隠題」については、人見恭司「物名歌概念の変遷について―『隠題』という語を通して―」(『国文学研究』一九八八年六月号)に詳しい。

- ⑥ 『賀茂真淵全集』第九卷(統群書類従完成会)所収「古今和歌集打聞」による。

- ⑦ 古谷範雄『俳諧歌・物名歌』小考(『和歌文学研究』第五七号、昭和六三年二月)に詳しい。

- ⑧ 深谷秀樹『物名』の和歌―古今集・拾遺集を中心に―(『日本文学文化』二号、二〇〇二年。同氏「三代集時代の物名歌―食物を詠んだ歌を中心に―」(和歌文学会・第四七会大会研究発表、二〇〇一年十月)で指摘されている。

- ⑨ 片桐洋一編著『拾遺抄』(大学堂書店、昭和五二年三月)所収の「研究編、四、拾遺抄から拾遺集へ」による。和歌配列の基本方針として「言葉による和歌の連続性」を指摘されている。しかし、物名巻においては、この配列方法に反して「同じ作者の歌をまとめる方法」がとられたために、植物(一) 動物虫(一)、植

物(一)、地名、植物(三) 動物(二) その他、と植物群を三分割するという結果になってしまったと分析されている。

- 同様の指摘は、『古今和歌集以後』(笠間書院刊、平成二二年十月)Ⅲ「拾遺和歌集」の成立と方法、一「拾遺集」の組織と成立―「拾遺抄」から「拾遺集」へ―においてもなされている。

- ⑩ ⑨と同書による。

- ⑪ 萩谷朴校注『枕草子』(新潮日本古典集成)新潮社)による。

- ⑫ 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(『新日本古典文学大系』岩波書店)の脚注による。

- ⑬ ⑫と同書による。

- ⑭ 萩谷朴著『平安朝歌合大成―増補新訂』(同朋舎出版、一九九五年五月)所収本文による。

- ⑮ 『私家集大成 中古Ⅰ』(明治書院)所収「伊勢Ⅲ」による。

- ⑯ ⑭所収の同歌合の解説による。

- ⑰ 片桐洋一著『拾遺和歌集の研究 校本篇』(大学堂書店、昭和五五年十一月)所収の定家本系による。ただし異本系統では「天つ星かも」の本文もある。

- ⑱ ⑨と同書所収の「本文編」による。

- ⑲ 『日本歌学大系 別巻三』(風間書房)による。

- ⑳ 『拾遺集』の和歌の特色については拙稿『拾遺集』初出歌人の詠風(『大谷学報』第六四巻第四号、一九八五年)参照。